シベリアを行く

世界労組大会と視察記（2）

北岡　隆

十一月二十七日午後六時三十分ナホトカにつく。シベリヤの土をふみしめ、寒いという以外とりたてて感情もわかぬまま、宿舎に予定されている「ポストーク」（極東の意）ホテルへ向う。

高台にあるホテルからは港町の灯一つ見えず真つ暗。ネオンもなければ看板もない。だが、考えてみればそれが当然のような気がする。この国は社会主義の国でありすべての産業が国有国営では弱肉強食の資本主義社会のように宣伝の必要もないからだろう。すべてを合理的に、必要いがいのムダを省くという社会主義体制の一断面を見たような気がした。

夕食後、午後十時から約二時間文化宮の見学を終わつてシベリヤの第一夜の夢をむすんだ。

扉をひらく寶庫

翌二十八日、ナホトカからハバロフスクへ向う。二十六時間ぶつ通しの汽車の旅である。全くシベリヤの土地は広い。地図をひろげて見たら西ヨーロツパの二倍、アメリカ合衆国やオーストラリヤもすつぽり入るような大陸である。見渡すかぎりの雪原には何一つさえぎるものもない。このぼう大な土地にわずか一、八五〇万人しか住んでいないとのことである。

しかし、ここにも最近一つの炭田で一兆トンというカンクスアチンクスや、トウングスカ、レナという炭田では無尽蔵とみられる石炭、さらに鉄鉱でもクラスノヤルクス地方だけでも数十億トン、そしてシベリヤ全体の地下には、ごんぞ二〇〇年間取り尽せない金銀プラチナ、タングステン、チタンなどの鉱層や、ダイヤモンド鉱層が発見されているといわれる。深い雪に埋もりつづけたシベリヤもその一つ一つが人民の力によつてベールをはがされている。自然の力のすべてが人間の幸福のため利用できる日も、この国にはさして遠い話ではなかろうとさえ感じさせられた。

すべてが驚きと感激

二十九日午前十一時ハバロフスクにつく。現地組合幹部多数の出迎えをうけ、バスで直ちに市内見学に向う。区画整然とした幅広い道路に面した三十七階建ての高層建築のすべてが、労働者の住宅か大・中、小学校、病院、文化宮といつたものでしかない。一間三万三千メートルもある総合グラウンドなど、われわれの目にうつるものすべてが驚きと感激の連続だつた。

資本家のいない労働者と農民だけの国ならではできないことであろうが、何と幸福な人民だろうとうらやましくもあり、また反面、日本の資本家に憎しみさえわいてくる。

代表団の希望によつて日本人墓地に立ちより同胞のめい福を祈り戦争に絶対反対し真の平和を守るため闘うことを誓つた。

午後四時半、予定の飛行機が天候不良のため午後十一時に出発、夜間飛行のため雪原のシベリヤを見ることができなかつたことは残念だつた。

いよいよモスクワへ

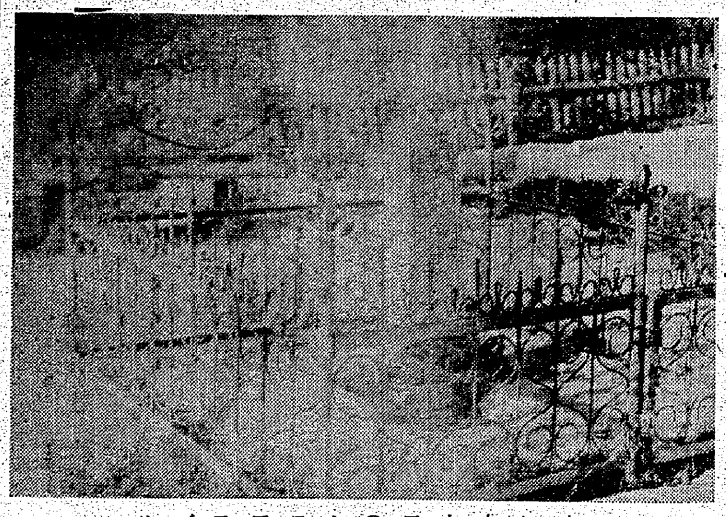
三十日午前十一時モスクワ着、時差修正で時計を午前五時にもどす。ホテルにつき大会傍聴の手続きを終え、クレムリン宮殿の見学。十二月一日から三日間、労働博物館、レーニンスタジアム、ボリショイ劇場、市内見学などを行なつた。労働博物館はロシヤの今日までの各産業の歴史を写真とグラフで示してあるが、全部見学するのに二日かかつた。

ここで筆をとめたとするなら、私の報告の足りなさで皆様方も疑惑を感じられるだろうが、ソ政連府が日本の資本家階級と全く異なるところは「働く前にまず保安」という点で、徹底的な予防措置と教育そして労働者の保健衛生に万全の注意を払つていることではなかろうかと思う。

世界労組大会ひらく

十二月四日、いよいよ第五回世界労組大会がひらかれる。古めかしいクレムリン宮殿内につくられた近代建築、屋上には数十本の赤旗がひるがえつている。この会場ではついさいきん第二十二回共産党大会が行なわれたところだと説明された、が今日からは働く者の代表で働く者の幸福を追及するための会議が開催されるわけである。会場は色々な人種の人々で一ぱい。盛んに握手を交換、ジャパンと英語で書かれたイスに座る。私達の前にはポーランド、キューバなどの代表がいる。すでに大会は始つた。

ルイサイヤン書記長から五時間にわたつて報告提案された行動綱領の内容と、各国代表の討議については次回から報告するが、弾圧と分裂工作は日本のわれわればかりでなく、もつともつと苦しい闘いをしている人が多いことを、あらためて認識することができた。



ハバロフスクの日本人墓地

長期抵抗で結実を

政転上京団を囲み座談会

政転闘争は一応の成果をあげて終止符を打つたが、組合からは第四陣までが上京し、不自由な幕舎生活の中から連日活動をつづけ全員元気に帰山した。編集部では団員多数による座談会を計画したが、日程の都合がありとくに小隊長六名に集まつてもらい、政転闘争の状況を話してもらつた。（司会＝永田組織次長　出席者＝命婦（宮浦）、砥上（四山）、橋本、中島（三川）、阿久津（本所）、江口（港務）

品川駅でのビケ

司会　みなさん大変ご苦労さんでした。実は多くの人に集まつてもらう予定をしていたんですが日程の関係もあり、みなさんたちに出席してもらつたわけです。まず最初に、現地の状態やわが方の内部的な情況などで意見を出して下さい。

命婦　全般的にみて、政転闘争に対する実感がうすかつたように感じた。命をかけて出てきた解決するまでは帰らんぞという雰囲気がうすかつたように思つた。

司会　それは国会デモからある程度変つたんではなかろうか。私が感じたのは、品川駅でさすが三池の労働者だと思つたのは警察が来たときわれわれは座り込み夜明けになつたんだが、警察が出て来るとみんな目をさまして抗議する。警察がいなくなると眠るわけだが、この態度はさすがに何回も闘いを重ねてきた自信からだと思つた。怪拳亘動に走るようなことが全然なかつた。

砥上　第一陣が品川でやつた、おれたちも何かやらねばという気構えは強かつたな。

雨の中の通産省での座り込みは相当なものだ。よその支部は車庫やら屋内に入つてしまつたが三池は毅然として隊列を組んで動かなかつた。さすが違つていたな。

ものいつたホッパーの経験

司会　幕舎での苦労談はどうですか。

砥上　輸送だな。それと衛生面。とくに注意させたのは生水の飲用禁止だつた。伝染病でも出れば大変だから。

命婦　衛生面は都内でも同じだつた。動員体制だから伝染病でも出れば隔離され一人ではすまない。必ず敵に利用されるのでそれを心配した。

司会　ホッパーでの経験がとても生かされた。正直にいつて、こんどの大動員にふみきつたのも三池闘争の経験があつたからだと炭労もいつていました。

阿久津　確かにおらゆる面で不十分だつたが、ホッパーでの経験を生かしよくやつたと思う。

砥上　高松の労働者が「三池には足を向けて寝られん」といつていた。なぜかというと、ここでは仕出し屋から飯をもつてくるが、三池のときは主婦たちが心をこめて炊出してくれた、心のこもつた飯だつたからとても美味しく、仕出し屋の飯の比較にならぬ、よくしてもらつたというわけである。

江口　実際、野宿覚悟でいつたがよく炭労はやつたと思う。

よくやつた炭労本部

司会　それと他の単産が本気で支援してくれたことですね。全逓の宝樹委員長が「長期化した場合、炭労だけでは大変だろうから食うことと寝ることは、大単産の委員長が集まつて引き受けることを決めた」とそこまで決意してくれていた。

今までの闘いの累積が、みんなに理解を深め、全体的にものすごく前進していると思いました

阿久津　輸送の面だが、隊付きの社青同の人たちが実に要領よく案内してくれた。実に頭が下がつた。

中島　われわれがついた時も迎えにきてくれたが、その留守中、だれもいないので幕舎に木炭をおこしてくれていた活動家がいた田川の渡辺さんという人だが掃除までしてくれていた。みんなこれにはとても感謝していた

風雨の中を国会請願する三池の上京団

不満てないが物足りなかつた

司会　政転の結論が出たあとの幕舎での雰囲気はどうでしたか。

阿久津　一発勝負でさめられるものではないという感じだつた。以外という気持と、物足りない不満があつた。

司会　いつぺんに片付くものではないということは、三池の人は案外理解するのではないかと思つた。それは今の長期抵抗路線の姿勢にならねば、政治闘争にはならんということ。

阿久津　本当に合理化闘争をやつていると理解がずつとゆくと思う。

命婦　闘争は大正労組だと思う。

不満は強かつたろう。

司会　それで感心したのは、どこでもだが経過報告をうける場合大正をふくめて片付けろといつていた。自分のところが片付けば、よそはどうでもよいというのでなく、大正のことをつねに頭においていた。

橋本　大正の組合員がとつた行動は静かなものだつた。

阿久津　とんどの政転の中でも大正が一番立派だつた。本当に闘つてくれば、労働者は違うものだと思つた。

司会　こんどの闘いで民社、全労は完全にその姿をバクロしたと思つた。今までは見せかけのごまかしをしていたが、無期限スト直前でもあり、何も芸をするひまがなかつたわけだな。

抵抗こそが基本

司会　こんどの問題について。

阿久津　いかに法律化されても現場でやられると何もならぬ。職場での抵抗の姿勢が大事だろう。

砥上　大量解雇は一応食い止めたが、会社は合理化をすすめる。その場合、調査団の来る前に肩たたきでやられるなら何にもならぬ。結局三池の場合、肩たたきは必然的に第二組合に行くだろう。第二組合はますます追いこめられることだろう。

江口　要は各職場での抵抗だ。これがないかぎり立派なものをとつても何にもならぬ。こんどの結果に実を結ばせるかどうかは抵抗だ。それがないかぎり調査団もよい結論を出さぬだろう。

政転闘争は一応の終結をみたが、炭労では動員に先き立ち全国へオルグを派遣し、政転闘争の浸透をはかつた。本号ではとくにこれらのオルグたちが活動を通じて見聞した、各地の組合活動などの点について集録してみた。

これが全労の実相

静岡オルグ　私は静岡へ入つたが伊東、熱海、沼津など四十四組合まわりました。静岡県には比較的全労、中立系の組合が多く私がとくに感じたのは二用組合に対する私たちの考えが、まだまだ甘いということです。

いくつかの例を出してみます。富士製紙（全労）、ここは七年間全然賃上げをやつていない。組合執行部がひどいもので、ある時組合員を中庭に集めて職場や賃金への不満を言わせたのです。組合が主催だから組合員は安心して発言したのですが、二週間ほどするとその日発言した組合員が職場から姿を消すのです。その場合、本人を無理に休ませ企業主病院へ連れて行く。

ところが数日後、会社から解雇状といつしよに病院の診断書がつけられて本人に送られてきます。組合員は怒りて組合へもつていくと、組合では「労働協約との関係で仕方がない」と意見を封じられ結局首切られるというわけです。

そういうわけで、ついに組合員の不満が爆発し、一回目と二回目は失敗したが、三回目に組合結成に成功しています。

数は少ないが主導権握る（国鉄三島）

日赤はいまを国的に合理化をすすめ、第二組合をつくつていますが、経営者の合理化に第二組合は賛成しています。第二組合人数は少くとも第一組合員が完全に主導権を握つています。

失敗にめげず　組合結成

オルグが語る各地の活動

それからさいきんどこでも第二地区労の結成がなされており、これは全国的な傾向のようです。東京電力の伊東分会では幹部は全労の方向でやつていますが、全労反対のバンフが現場ではられており、勢力は半々だと組合員はいつていました。

国鉄三島分会には第二組合員が三倍の勢力ですが、人数は多くても全く元気がなく、私がいつたときも、第一組合のものは元気に手を上げて声をかけました人数は少くとも第一組合員が完全に主導権を握つています。

日赤はいまを国的に合理化をすすめ、第二組合をつくつていますが、経営者の合理化に第二組合は賛成しています。第二組合とはそういうもので、どこでも目先きの利益の判断ばかりで行動しています。

また、三池の第二組合の平和協定がかなり知られており、しかも総評系なら分るが全労系もこの協定には批判をしていました

旅館の番頭、女中さんが組合づくり

岐阜オルグ　私がとくに感心したのは県下の温泉地で下呂というところで、女中や番頭さんが一般労組をつくつていること。これは全国的にも珍らしい思いました。

結成の動きは二、三年前からあつたんですが、経営者の弾圧で中心になつた人がクビになり、やつと昨年八月結成され、一八〇名のうち一六〇名が加盟して一生懸命取組んでいます。

こんど三池の人たちと交流して三池からいろいろ教わり指導を仰ぎたいといつていました。

それからどこへ行つても感心したのは、黒い羽根バッジをつけていることと、三池の組合歌とがんばろうの歌がうたわれることです。

三池帰りのオルグの活躍

北海道オルグ　三池に闘争中オルグでとられた人たちが、非常に活躍して真面目な組織づくりをされていることです。そして三池の実情をこの人たちが、直接組合員や主婦に知らせる努力をされているのには非常に感心しました。

静岡オルグ　つくづく感じたのは労働者の土根性といいますか、中小企業の労働者がひどい仕打ちをされている中で労働組合をつくろうと、何回も失敗してやつと結成しています。組合員も自分たちでおさめている所が非常に多いのです。

これをみて三池のわれわれは組織が大きいのでそう考えていなかつたが、一人ひとりになつた場合はまだまだ反省する必要があると思いました。